

【 復活のトロパリ 第2調 】



しせざるいのちよ、なんぢしにくだりし
死生 命 爾 死 降

とおき、かみのせいひかりにてぢご
時 神 性 光 地 獄

くをころせえり。しせしものをちかよ
殺 死 者 地下

りふくかつせしめしとおき、てんぐんみな
復 活 時 天 軍 皆

よびていええり、いのちをたもうしゅ
呼 日 生 命 賜 主

ハリストスわが か みよ、こうえいはなんぢに
吾 神 光 榮 は 爾 んぢに

き い す。

歸

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】



しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使徒等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實 神 智 役 者 聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
神 撰 笛 愛

にみちた るうつわ、わがくにのこう
満 器 我 國 光

しよ お しゃ、あしとしゆきょうせいニコライ
照 者 亜使徒主教聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
全世界 爲 生 命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。
三者 祈 給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとことおとせいしんにき
光 榮 父 子 お と 聖 神 歸

す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
成 聖 者 亜使徒聖 我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの
爾 初 我 國 於 己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
外 來 者 知 れ ども、ハリストスの

ひかりとあたたかきをながし、なんぢの敵
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか
 屬 神 子 爲 彼 等 神
 みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩 寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今 此 教 會 爲 祈
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給 あ え 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べよ。

【 復活のコンダク 第2調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世
 ぜんのおのきゆうせいしゅよ、なんぢはかよりふ復
 全 能 救 世 主 爾 墓 復
 くかつせしに、ぢごくはきせきをみて
 活 地 獄 奇 蹟 見
 おののき、ししはおき、ぞうぶ
 慄 の 死 者 起 お 造 物
 つはみてなんぢとともによろこび、アダムは
 見 爾 偕 喜

と も に た の し い み 、 わ が き ゆ う せ い し ゆ
 共 樂 我 救 世 主
 よ 、 せ か い は つ ね に な ん ぢ を ほ め う と お
 世 界 常 爾 讃 歌
 お う。

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せい の もの よ、 われら を あわれ め
 常 生 の 者 我 等 を 憐

よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、 せい
 聖 なる 神 聖 なる 勇 毅 聖

なる じょう せい の もの よ、 われら を あわれ
 常 生 の 者 我 等 を 憐

め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、
 聖 なる 神 聖 なる 勇 毅

せい なる じょう せい の もの よ、 われら を あわ
 聖 常 生 の 者 我 等 を 憐

れ め よ 。 こう え い は ち ち と こ と せい しん
 光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ せ に、 ア ミ ン。
 歸 今 何 時 世 世

せい なる じょう せい の もの よ、 われら を あわ
 聖 常 生 の 者 我 等 を 憐

れ め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う
 聖 なる 神 聖 なる 勇

き、 せい なる じょう せい の もの よ、 われら を
 毅 聖 常 生 の 者 我 等

あわれ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ
の光 榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 プロキメン 主日第2調 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は、我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
主 我 力 我 歌 彼 我
が す く い と お な あ れ り 。
救

誦經) 主は厳しく我を罰したれども、我を死に付さざりき、

しゅ は わ が ち か ら 、 わ が う た な り 、 か れ は わ
主 我 力 我 歌 彼 我
が す く い と お な あ れ り 。
救

誦經) 主は、我が力、我が歌なり、

か れ は わ が す く い と お な あ れ り 。
彼 我 救

【 アポστόロス 使徒經 233端 エフェス書6章10節~17節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがエフェス人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) 兄弟よ、主及び其權の力に頼りて堅固になれ。神の全備の武具を衣よ、爾等が悪

ま はかりごと ふせ え ため けだしわれら たたかい けつにく おい あら すなわちしゅ
魔の奸計を禦ぐを得ん爲なり、蓋我等の戦は血肉に於てするに非ず、乃首

りょう おい けんべい おい こ よ くらやみ せくん おい てんくう あ きょうあく しよ
領に於てし、權柄に於てし、此の世の暗味の世君に於てし、天空に在る凶惡の諸

しん おい これ よ かみ ぜんびび ぶぐ と あ ひ おい ふせぎ な およそ
神に於てするなり。此に因りて神の全備の武具を取れ、悪しき日に於て禦を爲し、凡の

こと じょうじゅ た え ため ゆえ た しんじつ なんぢら こし つか ぎ よろい
事を成就して、立つを得ん爲なり。故に立ちて、眞實を爾等の腰に束ね、義の甲を

き わへい ふくいん よび もつ あし くつ さら しん たて と これ もつ あくてき ことごと
衣、和平を福音する預備を以て足に履はき、更に信の盾を執れ、之を以て惡敵の悉

くの火箭を滅すを得ん、又救の胃、及び神の劍、即神の言を取れ。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ、主にあつて、その偉大な力によって、強くなりなさい。悪魔の策略に對抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい。わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、權威と、やみの世の主権者、また天上にいる惡の靈に対する戦いである。それだから、悪しき日にあつて、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい。すなわち、立つて真理の帯を腰にしめ、正義の胸當を胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。また、救のかぶとをかぶり、御靈の劍、すなわち、神の言を取りなさい。

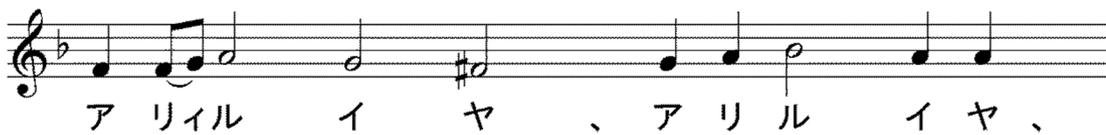
【 アリルイヤ 主日第2調 】

司祭) なんぢ へいあん
爾に平安、

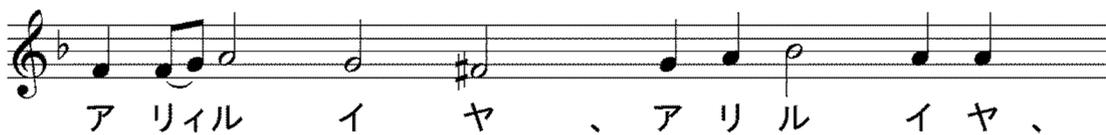
誦經) なんぢ しん
爾の神にも、

司祭) えいち
睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) ねが しゅ うれい ひ おい なんぢ き かみ な なんぢ ふせ まも
願わくは主は憂の日に於て爾に聴き、イアコフの神の名は爾を扨ぎ衛らん、





誦經) ^{しゅ おう すく またわれら なんぢ よ とき われら き たま} 主よ、王を救え、又我等が爾に呼ばん時、我等に聴き給え、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ ころろ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念
^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を
^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所
^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 ^{エヴァンゲリオン} 福音經 ルカ福音書71端 13章10~17節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き か とときスボタ ひとつ かいどう あ おしえ の ここ じゅう} 謹みて聴くべし、彼の時安息日にイイスス一の會堂に在りて教を宣べたり。爰に十

はちねんやまい き うれ おんな かが すこ の あた これ み よ
 八年 病 の 鬼を 患うる 婦 あり、 偃みて、 少しも 伸ぶ 能わざりき。 イイス 之 を 見て、 呼び
 これ い おんな なんぢ そのやまい と すなわちて かれ の かれただけ
 て 之に 謂えり、 婦 よ、 爾 は 其 病 より 釋 かれたり。 乃 手 を 彼 に 按 せ たらば、 彼 直 に
 の かみ さんえい かいどう つかさ スポタ いやし ほどこ いきどお たみ
 伸びて、 神 を 讚 榮 せり。 會 堂 の 宰 、 イイス が 安 息 日 に 醫 を 施 し し を 熅 りて、 民
 い わざ な ひ むいか そのうち きた いや スポタ ひ おい しゅ
 に 謂えり、 工 作 を 爲 す べ き 日 は 六 日 あり、 其 中 に 來 りて 醫 されよ、 安 息 の 日 に 於 て せ ざれ。 主
 かれ こた い ぎぜんしゃ なんぢら おのおの スポタ おい そのうしあるい うさぎうま かいばぶね
 彼 に 答 えて 曰 えり、 偽 善 者 よ、 爾 等 各 安 息 日 に 於 て 其 牛 或 は 驢 を 槽 よ
 と これ ひ みづか いわん むすめ こ おんなじゅうはちねん しぼ
 り 解 き、 之 を 牽 きて 飲 わ ざるか、 況 や アヴラアム の 女 なる 此 の 婦 十 八 年 サタナ に 縛
 られたる 者 の 結 を、 安 息 の 日 に 於 て 解 く べ から ざり しか。 彼 が 之 を 言 う 時、 彼 に 敵 する 者
 みな は しゅうみん かれ およそ こうめい しわざ よろこ
 は 皆 愧 ぢ、 衆 民 は 彼 が 凡 の 光 明 なる 行 事 を 喜 べり。

(比較用 口語訳) イエスが安息日に、ある会堂で教えておられると、そこに十八年間も病気の霊につかれ、かがんだままで、からだを伸ばすことの全くできない女がいた。イエスはこの女を見て、呼びよせ、「女よ、あなたの病気はなおった」と言って、手をその上に置かれた。すると立ちどころに、そのからだがまっすぐになり、そして神をたたえはじめた。ところが会堂司は、イエスが安息日に病気をいやされたことを憤り、群衆にむかって言った、「働くべき日は六日ある。その間に、なおしてもらいにきなさい。安息日にはいけない」。主はこれに答えて言われた、「偽善者たちよ、あなたがたはだれでも、安息日であっても、自分の牛やろばを家畜小屋から解いて、水を飲ませに引き出してやるではないか。それなら、十八年間もサタンに縛られていた、アブラハムの娘であるこの女を、安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったか」。こう言われたので、イエスに反対していた人たちはみな恥じ入った。そして群衆はこぞって、イエスがなされたすべてのすばらしいみわざを見て喜んだ。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン聖体礼儀) へ